

教師を育てた 言葉たち

No. 006

京都府・京都市立銅駝美術工芸高校

渡邊野子先生

わたなべ・なおこ

◎教職歴19年。同校に赴任して6年目。企画推進部主任。美術工芸科。

京都府・京都市立銅駝美術工芸高校 全日制／美術工芸科／共学／1学年約90人／2017年度入試合格実績（現浪計）：国公立大は、金沢美術工芸大、京都市立芸術大、広島市立大などに31人が合格。私立大は、成安造形大、京都精華大などに延べ67人が合格。



生 徒は誰もが大きな力を秘めています。一人ひとり成長の仕方やスピードが違うので、私たち教師はつい見逃していることがあるかもしれません。しかし、今はまだ見えなくても、すべての生徒が美しい力を持っていることを、私はたくさんの生徒から教わってきました。A君もその1人です。

A君は、教室では独りで過ごすことが多い生徒でした。独りでいることは悪いことではありませんが、持っている能力を社会で生かしていくためには、人とつながるスキルも身につけてほしい。そして、クラスの生徒たちには、お互いの個性を受け入れ、生かし合える力を養ってもらいたい……担任の私はそう思いました。

まずはA君のことを理解しようと、時間を見つけては彼と話をしました。自分が居心地がよいと思うことや困っていることを私に伝えることで、他者とつながる経験をしてもらいたかったのです。その一方で、人とかかわるのが得意な生徒には「いつも独りでいる子がいたら、みんなとかかわれるように気にかけてほしい」と話し、生徒同士の自発的な働きかけも促しました。

当初、A君との会話はぎこちないもので、彼も私に打ち解けた様子は見せてくれませんでした。かわり方が間違っているのだろうか不安になることもありました。それでも数か月すると、次第にA君から私に話しかけてくるようになり、さらにしばらくすると、ほかの生徒がA君に勉強を教えてもらう場面なども見られるようになりました。

1 年が過ぎたある日、A君は「話を聞いてほしい」と私のところへやってきました。そして、日常生活の悩みや将来への不安など、自分自身のことを一気に、一生懸命に語りながら、「先生はどう思いますか？」と私に尋ねました。私は、彼の言葉に精いっぱい耳を傾け、自分の考えを率直に伝えました。彼の人柄に触れ、知らなかった彼を発見していく思いがしました。そして、ひとしきり話し終わると、A君は私に言ったのです。「**これが僕です**。僕のことを分かっていただけでしょうか」。

思いもよらない言葉に私は驚きました。そして、A君にとって、他者に自分のことを話すということは、どれほど勇気があることだったのかを初めて理解しました。彼にとって「分かってもらう」ということは、ただ言葉をやり取りすることではなく、今の自分そのものを信頼できる他者に預けることだったのです。人が人に対して勇気を振り絞り、力強い意思を持って自分の思いを率直に伝える美しさを前に、私は感動で胸がいっぱいになりました。

社 会には多様な個性を持つ人たちがいます。そして私たちは、自分にはない個性を前にした時、それを受け入れることに躊躇することもあります。しかし学校は、お互いの個性を自分の尺度で解釈せず、誰もが秘めている美しい力を信じ、相手の立場に自分を置いて理解し合える場であってほしいと思います。すべての生徒が、「これが私です」とありのままの自分を仲間へ預け、安心して居続けられるクラスをつくっていきたくと思っています。